

## C-4

### 西オーストロネシア諸語の看過される裸態構文

野元 裕樹 (東京外国語大学)

nomoto@tufs.ac.jp

#### 要旨

本稿では、西オーストロネシア諸語の態体系の議論においてその存在が看過されてきた、形態的標示を持たない裸態構文が、態体系の深い理解にとって重要であることを論じる。フィリピン型ではタガログ語を取り上げ、被動者態のように被動者が主格名詞句となるものの、形態的に無標の「裸被動者態」が態体系の中に存在することを指摘する。これに基づき、フィリピン型ではすべての態構文が形態的に有標であるという従来の見方を改める。インドネシア型ではマレー語・インドネシア語を取り上げ、形態的に無標の能動文が能動態標識 *meN*-の省略により生じるものではなく、独自の「裸能動態」に基づくものであると主張する。*meN*-の省略はインフォーマルな文体で起きるとされるが、文体に関わらず *meN*-が生起しない現象や裸能動態を独自に認めなければうまく分析できない現象の存在がその根拠となる。

#### 1 はじめに

西オーストロネシア諸語の態体系は大きく、フィリピン型とインドネシア型に分けられる (Chen and McDonnell 2019 など)。フィリピン型は3つ以上の態構文(行為者態、被動者態、場所態など)を有し、それらすべてが形態的に有標で、いずれか1つを基本構文とみなすことはできないとされてきた。(1)はタガログ語の例である。

- (1) a. *Nag-bigay* ng bulaklak sa bilanggô ang bátà.  
行為者態. 完了-give GEN flower OBL prisoner NOM child  
'The child gave a flower to the prisoner.'
- b. *I-b<in>igay* ng bátà sa bilanggô ang bulaklak.  
被動者態-<完了>give GEN child OBL prisoner NOM flower  
'A/The child gave the flower to the prisoner.'
- c. *B<in>igy-an* ng bátà ng bulaklak ang bilanggô.  
<完了>give-場所態 GEN child GEN flower NOM prisoner  
'A/The child gave the prisoner a flower.' (Kaufman 2017: 590–591)

インドネシア型は普通、形態的に有標な能動態・非能動態および形態的に無標な非能動態の3つから成ると特徴付けられる。(2)はマレー語の例である。(2c)は形態的に無標な非能動態で、動詞は語幹形を取り、動作主が動詞の直前に生起する。この構文は伝統的には受動態の一種であると考えられてきた。しかし、近年、英語で書かれた文献では「目的語態 (Object Voice)」という名称が用いられ、受動態とは別個の態であるように記述されることが多い。

- (2) a. Mereka sudah *men-[t]andatangani* borang itu.<sup>1</sup>  
3PL already 能動-sign form that  
「彼らはもうその書類にサインしている。」
- b. Borang itu sudah *di-tandatangani* (oleh) mereka.  
form that already 受動-sign by 3PL  
「その書類はもう彼らに(よって)サインされている。」

- c. Borang itu sudah mereka *tandatangani*.  
 form that already 3PL sign  
 「その書類はもう彼らにサインされている。」

本稿では、フィリピン型、インドネシア型、いずれの議論においてもその存在が例外的・周辺的として看過されてきた、形態的標示を持たない裸態構文が、態体系の深い理解にとって重要であることを論じる。具体的には、フィリピン型では態標識を持たない被動者態的構文、インドネシア型では形態的に無標の能動態構文である。

以下、2節でフィリピン型、3節でインドネシア型について論じる。本稿では、フィリピン型はタガログ語、インドネシア型はマレー語・インドネシア語（断りがなければインドネシア語）を代表例として取り上げる。4では、裸態構文を視野に入れて態体系を捉え直すとともに、なぜ当該の裸態構文が看過されてきたかについて考察する。

## 2 フィリピン型の裸被動者態

一部の動詞では(3)のように、動詞が態標識を取らず、語根形（+使役標識）で用いられることが報告されている (Bloomfield 1917; Himmelmann 1991; Kaufman 2017)<sup>2</sup>。

- (3) a. *Bigay ni Nonoy kay Neneng ang bulaklak.*  
 give GEN Nonoy OBL Neneng NOM flower  
 「ノノイはネネンに花をあげた。」 (Kaufman 2017: 614)
- b. *Pa-bigay ni Nonoy ang bulaklak.*  
 CAUS-give GEN Nonoy NOM flower  
 「ノノイは花をあげた。」<sup>3</sup> (Kaufman 2017: 615)

Kaufman (2017)によれば、主語／軸項（＝主格名詞句）は必ず被動者となる<sup>4</sup>。これは(1b)の被動者態と同じである。従って、この裸態構文は「裸被動者態」と呼べる。

Himmelmann (1991: 39–40)は、裸被動者態はBloomfield (1917)を除けば、先行研究の中でほぼ認識されていないと述べている。管見の限りでは、その後の約20年間も態体系の議論の中で裸被動者態が登場することはほぼない。裸被動者態は例外的と看過することもできるが、逆に多くの一般的事例に覆い隠された態体系の中核であるとも考えることもできる。従って、フィリピン型の態体系は、形態的に無標の態を含むという点では、日本語や英語と変わらない。異なるのは、頻度の低い構文が形態的に無標である点である。

<sup>1</sup> 接頭辞 *meN-*の鼻音 *N* は語幹の最初の音により形が変化する。語幹が無声閉鎖音で始まる場合、閉鎖音が脱落する。本稿では脱落する閉鎖音を [ ] に入れて示す。

<sup>2</sup> 近完了 (recent perfective) 構文も態標識を取らない。しかし、主格名詞句が生起しないため、(1) や (3) と共に論じるべきものではないと考える。

<sup>3</sup> Kaufman は名詞化を想定し、それぞれ *The flower is a gift of Nonoy to Neneng*, *The flowers are Nonoy's caused gift* と訳している。

<sup>4</sup> ただし、Himmelmann (1991: 40) は命令文では動作主が主語／軸項となると述べている (例: *Hintay ka!* [wait 2SG.NOM] ‘You wait!’)。

### 3 インドネシア型の裸能動態

マレー語・インドネシア語では、能動態標識 *meN-*が生起しない能動文の存在はよく知られている。しかし、それは *meN-*の省略の結果であると分析される (*meN-*省略説)。省略はインフォーマルな文体で起き、それ以外では非文法的であるとされる (Sneddon et al. 2010 など)。そのため、形態的に無標の裸能動文は態体系に関する一般化に寄与しない。だが、「裸能動態」が独自に存在すると考えた方がよい現象がいくつも存在する。それらの現象では、*meN-*の生起・不生起を文体差によって説明することができない。

#### 3.1 命令文

(4) のように、他動詞の肯定命令文では文体に関わらず、*meN-*が生起できない<sup>5</sup>。

(4) *Tutup!\*Men-[t]utup pintu!*

close/ACT-close door

‘Shut the door!’

(Sneddon et al. 2010: 333)

裸能動文に *meN-*の省略を想定する *meN-*省略説では、なぜ省略が義務的になるのかという疑問が生じる。一方、裸能動態を独立した態とみなす場合、命令文は2つの能動態のうち、形態的に無標の方を用いるというような記述ができる。

#### 3.2 *meN-*を超える移動

インドネシア型の能動態標識は、(5) のようにそれを越える移動を阻止する (Saddy 1991 など)。

(5) a. *\*Apa-kah yang Ali tidak mem-beli t?*

what-Q REL Ali not ACT-buy

(意図された解釈：「アリが買わなかったのは何ですか?」)

b. *Siapa-kah yang t tidak meN-beli buku itu?*

who-Q REL not ACT-buy book that

「その本を買わなかったのは誰ですか?」

(5a) を文法的に表現するには、*di-*受動文 (6a) または形態的に無標の文 (6b) を用いる。

(6) a. *Apa-kah yang tidak di-beli t (oleh) Ali?*

what-Q REL not PASS-buy by Ali

b. *(\*)Apa-kah yang Ali tidak beli t?*

what-Q REL Ali not buy

<sup>5</sup> 目的語が生起しない場合と総称的である場合は、*meN-*の生起が可能である。Sneddon et al. (2010: 333-334) は、前者は疑似自動詞文であり、後者は目的語と動詞が複合した自動詞文であるとみなしている。

(i) a. *Mem-baca sekarang!*

ACT-read now

‘Read now!’ Sneddon et al. (2010: 333)

b. *Mem-baca buku sekarang!*

ACT-read book now

‘Read a book [≈ do book reading] now!’  
Sneddon et al. (2010: 334)

「アリが買わなかったのは何ですか？」

meN-省略説では、(6b) は、meN-の義務的省略が移動によっても生じるとする。例えば、Sato (2012) は、問題となる移動が主要部 v\*の抽象的な D 素性を削除し、その場合、D 素性の削除がなければ meN-として実現される v\*が $\emptyset$ として実現されると提案している。一方、裸能動態を独立した態とみなす場合、そのような削除操作を想定する必要はなく、(6b) は裸能動文ということになる。Cole and Hermon (2005); Cole et al. (2008) が指摘するように、教養のあるインドネシア語話者は (6b) のような文を規範的には容認されないが、記述的には容認可能であると判断する。規範はフォーマルな文体で強く意識されるものである。従って、この容認度の差はやはり文体と関係するものであると考えられる。

以下、この現象が関わりとされる現象を2つ取り上げる。より複雑な現象のためか、いずれも文体に左右されない。

### 3.2.1 スルーシング

(7) のような有標の能動文に基づくスルーシングが文体に関わらず可能である (Fortin 2007 など)。

(7) Saya tahu Ali tidak mem-beli sesuatu, tapi (saya) tidak tahu apa.  
1SG know Ali not ACT-buy something but 1SG not know what

「私はアリが何かを買わなかったと知っているが、何をかは知らない。」 (cf. Fortin 2007: 1)

スルーシングの標準的分析では、疑問詞が節頭に移動し、それに続く先行詞と共通の部分が発音されなくなる (Merchant 2001)。

(8) I know Ali didn't buy something, but I don't know what [Ali didn't buy t]

この分析に従うと、(7) は (9) のような構造を持つ。

(9) ..., tapi (saya) tidak tahu apa [Ali tidak mem-beli t].  
but 1SG not know what Ali not ACT-buy

(9) には (5a) で見た meN-を超える移動が関与していることに注目されたい。従って、(7) は非文になるはずだが、実際には文法的である。(7) の適格性は (6b) のような形態的に無標の文の関与を想定すれば説明が付く<sup>6</sup>。

### 3.2.2 交差解釈

(10) のような文に見られる経験者の曖昧性は、文体に関わらず主節動詞が能動態標識を取らない時にも観察される (Nomoto 2011)。

<sup>6</sup> 一般に、スルーシングにおいては先行詞との態の不一致は認められない (Merchant 2013)。だが、meN-能動態と裸能動態は能動態の下位範疇であるため、態の不一致には当たらないと考える。

(10) Kucing kesayangan=nya *cuba* di-cium Amy.

cat pet=3 try PASS-kiss Amy

(i) 「彼のペットの猫はエイミーがキスしようとした。」(交差解釈)

(ii) 「彼のペットの猫はエイミーにキスされようとした。」(非交差解釈)

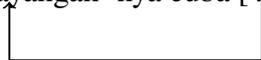
cf. Kucing kesayangan=nya *men-cuba* di-cium Amy.

cat pet=3 ACT-try PASS-kiss Amy

「彼のペットの猫はエイミーにキスされようとした。」(マレー語; Nomoto 2011)

この構文の(少なくとも交差解釈)では受動動詞の内項が主節の動詞を超えて移動する。

(11) kucing kesayangan=nya *cuba* [ *t* di-cium Amy ]



### 3.3 同時抜き出し

先行研究では、裸能動態を独立した態として認めないために、分析に問題が生じているケースがある<sup>7</sup>。Arka (2014) は、(12a) の文を、(12b) のように「目的語態」(Arka は被動者態と呼ぶ) の文から動作主と被動者の両方を抜き出した文であると分析している。裸能動態を認めない場合、動詞が形態的に無標になるのは「目的語態」しかないからである。しかし、インドネシア語の「目的語態」の動作主は必ず音形を持たなければならない、この分析には問題がある。類似の例について、Erlewine et al. (2017) は、動作主のみの抜き出しは非文法的だが、被動者も同時に抜き出される場合には文法的になると述べている。しかし、なぜそのような不思議なことが起きるのかについては説明がない。一方、(12c) のような裸能動文に基づく構造を考えれば、何の問題は生じない。

(12) a. Mobil mana=kah yang dia coba curi?

car which=FOC REL 3SG try steal

「彼(女)はどの車を盗もうとしたか?」

b. Mobil mana=kah yang dia=coba [ *t*<sub>被動者</sub> *t*<sub>動作主</sub> curi ]?

c. Mobil mana=kah yang dia coba [ *t*<sub>動作主</sub> curi *t*<sub>被動者</sub> ]?

このような事実を重視するならば、裸能動態は独立した態として認められるべきである。その場合、インドネシア型の態体系は三項対立ではなく、能動 vs. 非能動(受動)、有標 vs. 無標という2つのパラメーターにより定義される4つの基本的態構文から成ることになる。

## 4 まとめと今後の課題

本稿では、西オーストロネシア諸語の態体系の議論において看過されてきた2つの態について論じた。フィリピン型については、態体系の議論の中で考慮に入れられることがほとんどなかった「裸被動者態」の存在の重要性を指摘した。インドネシア型については、能動態標識の省略に過ぎないと考えられてきた「裸能動態」には、独立した態として認める十分な経験的動機があることを示した。看過されてきたこれらの形態的に無標の裸態構文を考慮に入れると、従来(13)のように考えられてきた西オーストロネシア諸語の態体系は、(14)のように整理し直すことができ

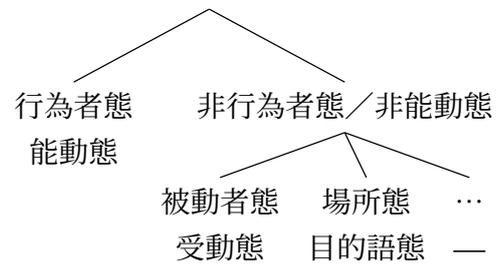
<sup>7</sup> 本節の内容は Nomoto (2021) による。

る。フィリピン型の場所態などは、裸被動者態に適用態接辞が付いたものとして扱うか、有標の被動者態の下位分類とする。

(13) a.



b.



(14) a. フィリピン型

	行為者態	被動者態
有標	行為者態	被動者態
無標	—	裸被動者態

b. インドネシア型

	能動	受動
有標	能動態	受動態
無標	裸能動態	裸受動態 (=目的語態)

裸態構文はなぜ看過されてきたのであろうか？それにはいくつかの理由が考えられる。まず、フィリピン型の裸被動者態については頻度が低いことが考えられる。頻度が低い現象は例外的・周辺的と捉えられやすい。さらに、裸被動者態は他の態と異なり、相・法の標示が見られないこともあろう。しかし、態は相・法と独立して考えることができるし、そうすべきである。次に、インドネシア型の裸能動態は頻度が理由ではない。インフォーマルな文体においては、形態的に無標の能動文はかなり頻繁に用いられるからである。そこで理由として考えられるのは分析上のバイアスである。一つは、インフォーマルな文体の軽視である。meN-省略説の背景には、インフォーマルな文体に見られる現象はフォーマルな文体に見られる現象の簡略化に基づくという見方があるのではないかと。次に、過度な通時的考慮によるバイアスがある。オーストロネシア祖語の態体系はフィリピン型に近いとされるため、インドネシア型も何とかそれに似せて分析しようとする傾向がある。裸受動態に「目的語態」という受動態とは全く関係のない名称が与えられたのもその現れであろう。最後に、標示の有標性に関するバイアスがある。あるカテゴリーを構成する要素の一つが無標であれば、他はすべて有標であるという暗黙の了解があるのではないかと。それに従うと、裸受動態が無標であるから、能動態が無標になることはあり得ないことになる。

本稿では、タガログ語、マレー語・インドネシア語しか扱っていない。そのため、本稿の議論が他の西オーストロネシア諸語一般に対して成り立つかは、本稿と同様の問題意識に立った他の言語の研究を待たねばならない。タガログ語の裸被動者態は頻度が低く<sup>8</sup>、オーストロネシア諸語の中で最も研究が進んでいるタガログ語ですら記述が少ないような現象である。他のフィリピン型の言語では、存在はするものの、まだ記述がない可能性がある。インドネシア型については、Cole et al. (2008: 1513) が形態的に無標の能動態が存在するマレー語・インドネシア語はインドネシア型の中で例外的であると述べている。しかし、上述のバイアスに注意しながら改めてデータを見直してみると、実は裸能動態が存在する言語は多いかもしれない。例えば、Davies (2005) と Crouch (2020) がそれぞれマドゥーラ語とミナンカバウ語について、従来不可能とされてきた裸能動態が実は観察されることを指摘している。

<sup>8</sup> 先行研究では具体的な値の指摘は見当たらない。今後の研究が必要である。

## 参考文献

- Arka, I W. 2014. Double and backward control in Indonesian: An LFG analysis. In *Proceedings of the LFG' 14 Conference*, ed. M. Butt & T. H. King, 26–46. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Bloomfield, L. 1917. *Tagalog Texts with Grammatical Analysis*, volume III of *University of Illinois Studies in Language and Literature*. Urbana, IL: The University of Illinois.
- Chen, V. & B. McDonnell. 2019. Western Austronesian voice. *Annual Review of Linguistics* 5:173–195.
- Cole, P. & G. Hermon. 2005. Subject and non-subject relativization in Indonesian. *Journal of East Asian Linguistics* 14:59–88.
- Cole, P., G. Hermon & Yanti. 2008. Voice in Malay/Indonesian. *Lingua* 118:1500–1553.
- Coon, J., D. Massam & L. D. Travis. 2017. *The Oxford Handbook of Ergativity*. Oxford: Oxford University Press.
- Crouch, S. 2020. Voice and bare verbs in Colloquial Minangkabau. In *Austronesian Undressed: How and Why Languages Become Isolating*, ed. D. Gil & A. Schapper, 213–251. Amsterdam: John Benjamins.
- Davies, W. D. 2005. The richness of Madurese voice. In *The Many Faces of Austronesian Voice Systems*, ed. I W. Arka & M. Ross, 197–220. Canberra: Pacific Linguistics.
- Erlewine, M. Y., T. Levin & C. van Urk. 2017. Ergativity and Austronesian-type voice systems. In Coon et al. (2017), 373–396.
- Fortin, C. R. 2007. Indonesian Sluicing and Verb Phrase Ellipsis: Description and Explanation in a Minimalist Framework. ミシガン大学博士論文.
- Himmelman, N. P. 1991. The Philippine challenge to Universal Grammar. Working Paper 15, Allgemeine Sprachwissenschaft, Institut für Linguistik, Universität zu Köln, Köln.
- Kaufman, D. 2017. Lexical category and alignment in Austronesian. In Coon et al. (2017), 589–628.
- Merchant, J. 2001. *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis*. Oxford: Oxford University Press.
- Merchant, J. 2013. Voice and ellipsis. *Linguistic Inquiry* 44:77–108.
- Nomoto, H. 2011. Analisis seragam bagi kawalan lucu. In *Isamu Shoho: Tinta Kenangan “Kumpulan Esei Bahasa dan Linguistik”*, ed. H. Nomoto, Zaharani A. & Anwar R., 44–91. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Nomoto, H. 2021. Crossed control revisited: The structure and interpretations of “want” and so on + passive verb in Malay/Indonesian. *Wacana: Jurnal Ilmu Pengetahuan Budaya* 22:338–364.
- Saddy, D. 1991. WH scope mechanism in Bahasa Indonesia. In *MIT Working Papers in Linguistics 15: More Papers on Wh-Movement*, ed. L. L. S. Cheng & H. Demirdash, 183–218.
- Sato, Y. 2012. Successive cyclicity at the syntax-morphology interface: Evidence from standard Indonesian and Kendal Javanese. *Studia Linguistica* 66:32–57.
- Sneddon, J. N., A. K. Adelaar, D. N. Djenaar & M. Ewing. 2010. *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. London: Routledge, 第 2 版.